

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370461

研究課題名(和文) 言語・コミュニケーションにおける場の理論の発展～近代社会の問題解決を目指して

研究課題名(英文) Development of Ba theory related with Language and Communication: Strive toward Solution of Modern Society Problem

研究代表者

大塚 正之(OTSUKA, MASAYUKI)

早稲田大学・法学大学院(法務研究科・法務教育研究センター)・その他(招聘研究員)

研究者番号：40554051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主客非分離、自他非分離の場の理論に基づき、言語及び非言語コミュニケーションが場の影響を深く受けていること、日本語は、場の影響が大きく場内在的な言語であり、英語は場の影響が小さく場外在的な言語であり、それが日英翻訳を困難にしていることが明らかとなった。

また日本語のコミュニケーションでは、複雑系における自己組織化現象が多く起きていること、当初場の影響を強く受けて活格、能格であった言語が場の影響が小さくなるに連れて対格言語化したこと、異文化コミュニケーションを行う上で、それぞれ文化が持っている場の違いがコミュニケーションの障害となっていることなどの点もある程度分かってきた。

研究成果の概要(英文)：This study adopted \*ba\*-theory based on inseparation of subject and object, or self and others and its main outcome can be summarized as follows: (1)Both verbal and non-verbal communication is strongly influenced by \*ba\*, (2) Japanese is “\*ba\*-internal” language whereas English is “\*ba\*-external” language, and (3) Such difference make the translation difficult.

Specifically, this study explored the following aspects in communication in Japanese language: (1) frequent emergence of self-organization in complex system and (2) transition from ergative language to accusative language. This study also explored that difference in the concept of ba could become the obstacles in intercultural communication.

研究分野：法学 哲学(場所の哲学)

キーワード：Ba-theory 場の理論 場の言語学 複雑系 エントレインメント 主客非分離 自他非分離 自己組織

## 1. 研究開始当初の背景

### (1)

これまでの言語学は、主客分離、自他分離の基盤のもとで形成されており、そのため、欧米では妥当することが日本語には妥当しない数々の場面が存在し、うまく説明ができない状態にあった。

### (2)

その理由は、日本語が欧米の言語と異なる特殊性を持っているからだと考えられたが、どこにその特殊性があるのかは、よくわかってはいなかった。そこで、場というものを考えることによって、日本語の様々な言語現象を解明できるのではないかと考えて、平成23-25年度研究において、主客非分離、自他非分離の場を考えることによって多様な言語の違いを明らかにできる見通しが生まれてきていた。

## 2. 研究の目的

### (1)

そうした背景のもとで、本研究では、場の理論に立脚し、言語及び非言語コミュニケーションの本質を明らかにすることを目指す。近代の要素還元主義に基づく近代科学の方法論に対し、コミュニケーションの本質が複雑系における自己組織化にあるという観点から場の言語学の方法論を明らかにし、これに基づいて、日本語と英語の構造的差異を明らかにし、そのうえで、日本人の英語教育、外国人に対する日本語教育にも資することを目的とする。

### (2)

具体的には、様々な言語現象の日英比較を行い、日本語は場内在的であり、英語は場外在的であるという仮説を立て、それぞれの言語現象というものが場の影響をどのように受

けているのかを解明し、また、場の影響の大きい言語現象においては、そこに複雑系におけるエンタテインメント（引き込み）現象がどのように生じているのかを観察し、併せて、そうした現象が身体的基盤とどのように関わっているのかを解明しようと考えた。

## 3. 研究の方法

### (1)

日本語は場内在的であり、言語現象には複雑系における引き込み現象がみられることを明らかにするため、実際の日本語の言語現象を英語の言語現象などと比較対照しながら、多様な言語現象の研究について、場の理論の観点から研究する。

### (2)

具体的には、場の言語研究会を概ね2か月に1回程度の頻度で開催し、日本語の会話現象の研究者、日英比較の研究者、場における共創現象の研究者らを招いて、研究発表をしていただき、その後、全員で、場の理論の観点から、ディスカッションを行い、深めた議論を行ってきた。

## 4. 研究成果

### (1)

研究協力者であるUCバークレー校のW.Hanks教授は、前回の科研費研究の結果を踏まえて、2016年、場についての論文を作成・発表し、また、パリ大学等で講義を行い、場の言語学の可能性について、欧米の言語学に場の言語学を紹介し、影響を与えた。

### (2)

多くの実例から、これまで日本語は主観的に事態を把握し、英語は、客観的に事態を把握すると考えられていたものが、場の理論を前提として考えると、決して日本語は主観的なものではなく、場があるために身体を含む

非言語情報が同時に存在する場に内在する形で語られることで、決して主観的にはならず、臨場感を持って場の状況を客観的に伝えることができているということを示すことができた。

併せて、英語は客観的だと言われるが、実際には、自分の体験を一度、自分から切り離し、外から見るとこう見えるだろうという主観的な推測から言語化している。そのため、一見すると客観的に見えるのだが、実質的にみると、英語は場外在性を特徴とすることを明らかにした。

(3)

日本語を母語とする話者が二人で共通の課題を実行しようとする場合、英語を母語とする話者の場合と比較して、無意識のうちに相互に引き込むエンタテインメントと考えられる現象（例えば、あいづちを打つ、一人が発言すると、それに引き込まれるように、それをほぼそのまま繰り返す、あるいは、引き継ぐ形で同様の発言がもう一人において行われる）が多く生じることが分かった。これは日本語が場内在的に語られることから、相互の引き込み現象が生じやすいことに起因すると考えられる。

このような現象は、会話の場合だけでなく、例えば複数人がサッカーなどの競技の解説を行う場合にも見られる。同じサッカーの試合を日本人の解説者2名が解説を行う場合と、欧米の解説者2名が解説をする場合とを比較すると、欧米の解説者は、それぞれ一人が解説すると、別の解説者がその解説が終わってから別の視点から解説を始めるのに対し、日本人の解説者は、一人が解説を始めると他方が相槌を打ったり、すぐに途中で引き継い

で同じ言葉を繰り返したり、同調する発言をすることが多く観察される。これも場における相互引き込みが生じているためと考えることができる。

(4)

以上のような引き込み現象は、つづさにみると、単なる言語的な引き込みだけでなく、身体動作の面から観察しても、見ることができる。さきほどのうなずきの動作も意図的なものというよりも、思わずうなずくというような無意識的な身体反応と思われる動作が観察され、共通課題の実行の場合も、同じ場において現前で行われている競技を観察している場合も、そこに身体的共振が生じていることを観察することができる。

身体的共振によるコミュニケーションについては、「手合わせ表現」の研究がある。「手合わせ」というのは、全く見ず知らずの人が同時に同じ場に多数参集し、お互いに音楽に合わせて全身を動かして移動しながら、出会った人と掌を合わせるという表現活動を行うことによって、コミュニケーションを共創するという活動である。この活動によって、自閉症の子も含めて、何度か繰り返す中で、お互いに手を押し合うようになり、掌に相手の気持ちが表現され、それが掌を通じて他方に届くことにより、積極的な意思疎通が共創され、それまで自分の中に閉じこもっていた人も表現活動ができるようになってくる。この現象も、複雑系における引き込み現象が生じて、コミュニケーションの基盤が形成されていく現象としてみるることができる。

(5)

英語では、一人称をI、二人称をyou、三人称を名前や人称代名詞で表示するのが普通であるが、日本語では、特に親族呼称において

は、三人称のみでなく、一人称、二人称についても、おかあさん、おじさん、おばあちゃんなどの親族呼称で呼ぶことが多く、最も弱い年少者の立場から呼び方を決めることが多いとされている。その傾向は、日本文化には場があり、家族の場においては、例えば、未っ子からみて、兄であったり、姉であったり、母であったり、祖父であったり、それぞれの親族的位置づけによって呼称が決まるという性質があり、この傾向は、その会話の場において、特に弱い立場の者がいれば、その者を基準として親族呼称が使用されるという研究結果が報告されている。これは、日本人は具体的な場の状況に応じて、弱い者を基準として親族呼称を用い、人称を表現するということを意味しており、これも、場内性から説明することができる。

(6)

このように語り手の視点を場の内部で移動させながら語るという方法は、親族呼称にだけ限られるものではない。例えば、同じ絵本でも、英語版のストーリーと日本語版のストーリーとでは、母語話者が違和感なく読み聞かせできるようなストーリーにする必要があるため、その表現の仕方は、おのずから母語話者に即したものになる。そして、英語版では外から観察して語るという形で一貫しているのに対し、日本語版では、語り手が絵本の中のキャラクターに話しかけたり、キャラクターの言葉で話をしたり、話し手の視点をとって語られたりすることがしばしばある。これは場の中で、自他融合的に語ろうとする特性が日本語の母語話者にあるからだと考えられる。

またこのような傾向は、直示表現における日英比較においても観察することができる。

日本語話者は、具体的な<今・ここ>という場の内部における距離から、近くを「これ・ここ」、遠くを「あれ・あそこ」で表示するが、英語のthisとthatは、これに対応せず、もっと抽象化したレベル(場から切り離された形)で使い分けが行われている。このような現象も、場の理論の立場から見ると、日本語は場内在的であり、英語は場外在的であることから生じる現象であると説明することができる。

(7)

更により一般的には、日本は場の文化を持っており、それに対応して、日本語は場内在的であり、これに対し、英語は、特定の民族にかかわらず、多民族で共有化されてきた結果として、特定の場に拘束されず、場外在的な言語として発展してきたという歴史的経緯があり、あらゆる場面でこの特徴は現れている。例えば、英語は特定の場から離れているため、一人称はI、二人称はyou、三人称も決まった代名詞で表現するのが普通だが、日本語では、それぞれの場に応じて、いずれの人称も多様に使い分ける。しかもその使い分けは決して恣意的ではなく、場に対応する必要がある。誤った使い方をすると、場違いになってしまうたり、礼儀知らずになってしまうのである。

<参考文献>

多々良直弘、スポーツ実況中継のコミュニケーションスタイル 実況中継の相互行為に現れる社会文化的価値観とその再生産、桜美林論考 言語文化研究(6)、2015、65 - 83

西洋子、三輪敬之、被災地での共創表現と共振の深化、アートミーツケア、7巻、2016、1 - 18

小森由里、親族間で用いられる他称詞の運

用、社会言語科学16巻1号、2013、109 - 126

成岡恵子、絵本における語り手の視点：英語絵本とその日本語翻訳の質的分析、東洋法学57巻1号、2013、480 - 455

Niimura, T. Contrastive Analysis of English and Japanese Demonstratives: Differences in Speaker Stance. Ph.D. thesis, University of London. 2013

## 5 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

大塚正之・岡 智之「場の観点から認知を捉える 主観的把握と客観的把握再考」『日本認知言語学会論文集』査読無、第16巻、2016、40-52

井出祥子「グローバル社会へのウェルフェア・リングイスティックスとしての場の語用論-解放的語用論への挑戦」『社会言語科学』査読有、第18巻2号、2016、3-18

[学会発表] (計8件)

— 井出祥子 ‘How and Why "Personal Pronouns" in East Asian Languages are Different from European Languages: Ba-based Approach (招待講演)、2016年12月18日、早稲田大学、東京

— 岡 智之「場の観点から日本語の主観性を再考する」日本認知言語学会第17回大会ワークショップ「場の言語学の展開 西洋のパラダイムを超えて」日本認知言語学会第17回大会、2016年9月10日、明治大学(東京)

— 櫻井 千佳子「ナラティブディスコースの「科白」部分に見られる視点の内在性「場」の共有に基づく事態把握の獲得

について」日本認知言語学会第17回大会ワークショップ「場の言語学の展開 西洋のパラダイムを超えて」日本認知言語学会第17回大会、2016年9月10日、明治大学(東京)

— 井出祥子 ‘How and why personal pronouns in East Asian languages are not equivalent to those of European languages: Explorations from ba-based thinking’

Sociolinguistic Symposium 21, 2016年6月17日、ムルシア大学、スペイン

— 櫻井 千佳子「語りの「場」のコミュニケーションにみられる文化とは」異文化コミュニケーション学会第30回年次大会、2015年9月20日、桜美林大学(東京)

— 大塚正之・岡 智之「場の観点から認知を捉える 主観的把握と客観的把握再考」日本認知言語学会第16回大会、2015年9月12日、同志社大学(京都)

— 井出祥子 ‘Towards a balanced approach to cross-cultural communication: The perspective from ba based thinking’ 第4回国際語用論学会アントワープ、ベルギー 2015年7月31日

— 井出祥子 ‘How is spoken Japanese more ba-oriented than English?’ The Second International Workshop on Linguistics of ba 2015年7月4日、函館未来大学

[図書] (計1件)

岡智之「場の言語・コミュニケーション研究の課題」場の言語・コミュニケーション研究会主催 講演とシンポジウム報

告書『ことば・身体・場』2017、34-48

[ その他 ]

岡智之「場の言語・コミュニケーション研究の課題」場の言語・コミュニケーション研究会主催シンポジウム『ことば・身体・場：競争社会から共創社会へ』招待講演、東京：早稲田大学、2017年1月

場の言語コミュニケーション・研究会ホームページ <http://banogenggo.com/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大塚正之(OTSUKA, Masayuki)

早稲田大学・法学大学院(法務研究科・法務教育研究センター)・招聘研究員

研究者番号：40554051

### (2) 研究分担者

井出祥子(IDE, Sachiko)

日本女子大学・文学部・客員研究員

研究者番号：60060662

岡智之(OKA, Tomoyuki)

東京学芸大学・留学生学生センター・教授

研究者番号：90401447

櫻井千佳子(SAKURAI, Chikako)

武蔵野大学・環境学部・准教授

研究者番号：30386502

### (3) 連携研究者

河野秀樹(KOUNO, Hideki)

目白大学・外国語学部日本語学科・准教授

研究者番号：00550831

### (4) 研究協力者

William.F.Hanks